

60391

教科書文庫

6

810

34-1949

26000
67137

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

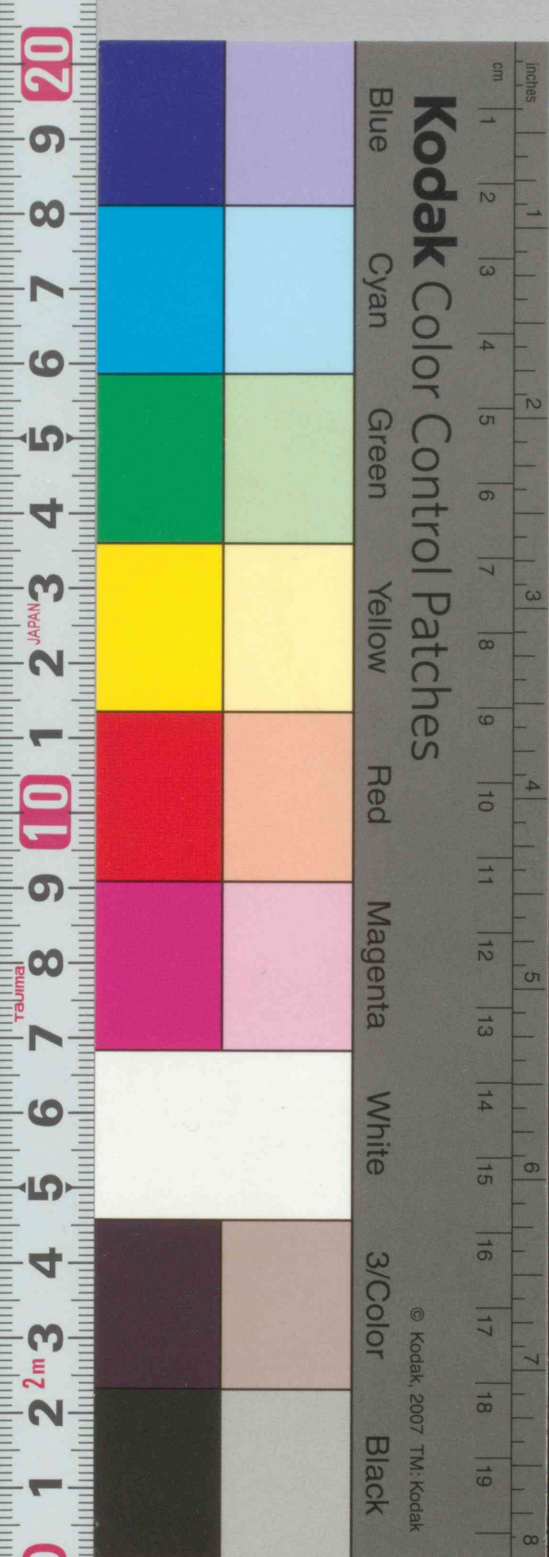


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文部省

3a
810
昭24

國

語

第三学年

上



資料室

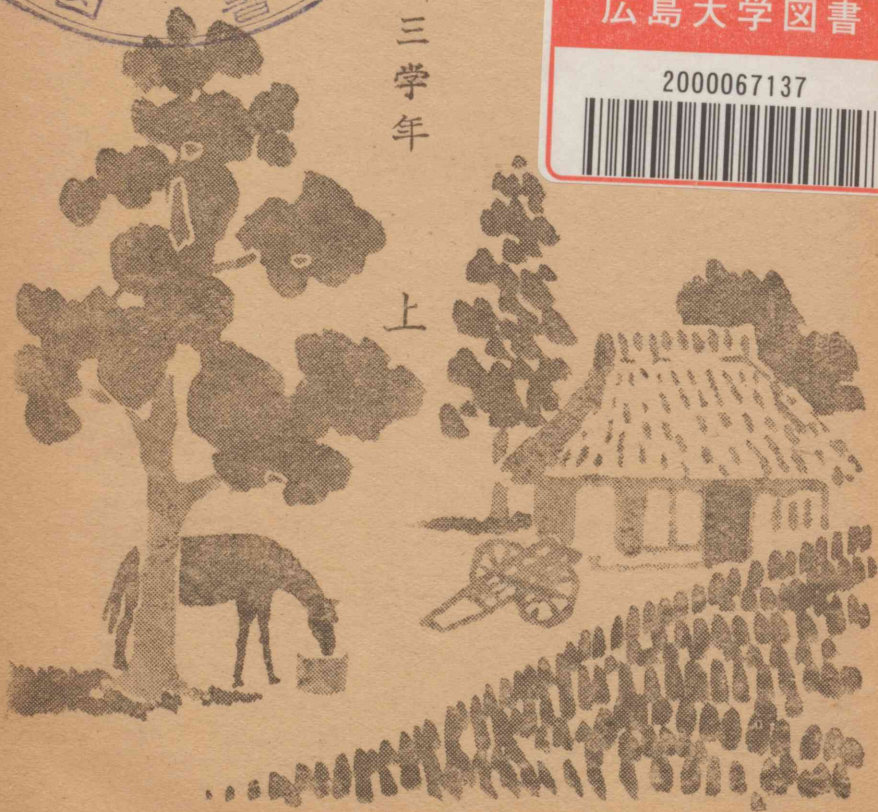
國

語



第三学年

上



教科書文庫
6
810
34-1949
2000067137

広島大学図書
2000067137

32
810
BB24



十二	ひわの子……………	九十四
十一	りょうかんさん……………	八十五
十	学級日記から……………	七十七
九	金のさかな……………	六十五
八	あさがおの花……………	五十九
七	星……………	五十二
六	まどをあけると……………	四十四



五	心と心……………	三十八
四	石炭……………	三十二
三	ありがとう……………	二十一
二	私の旅……………	八
一	川のうた……………	四

もくろく





一 川のうた

川のあかんぼ

山に雨がふる、きりがおりる、

夜は夜つゆがおりる。

水をふくんだ草のうた、こけのうた、

土のうた、いわのうた。

山から川のあかんぼが生まれる。

山のてっぺんのすぐちかいたところ、

小さいたにまに、小さいいずみ、

小さいたにまに、小さいながれ

山から川のあかんぼが生まれる。

川のあかんぼ、チヨチ、チヨチ、アワワ。

さあ、はいはいをして、たちして、

村にでましよう、町にでましよう。

川は大きくなる

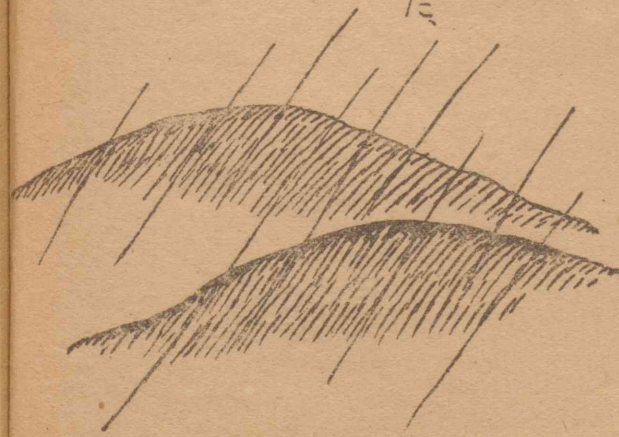
川は山からかけおりる。

小石をころころ、ころがして、

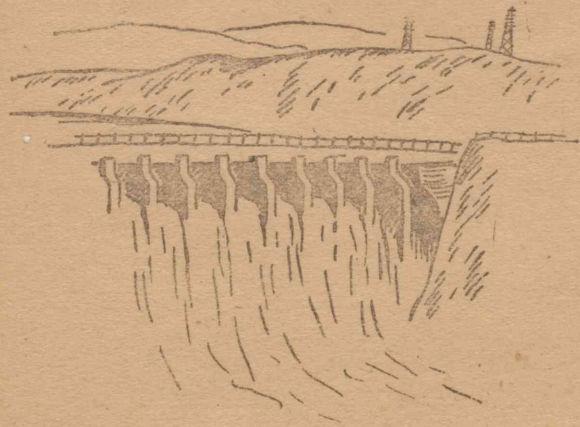
いわの上からとびおりて、

さかなとジャブジャブはしゃいで、

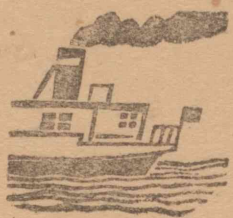
川は山からかけおりる。



川は友だちとあくしゅして
川はだんだん大きくなる。
ダムにせかれていけになり、
水力電氣をおこし、
水道の水にもなり、
川はだんだん大きくなる。
川は野原におりてくる。
野原をゆっくりにあるいていく、
水車をくるくるまわし、
たんぼに水をいれ、

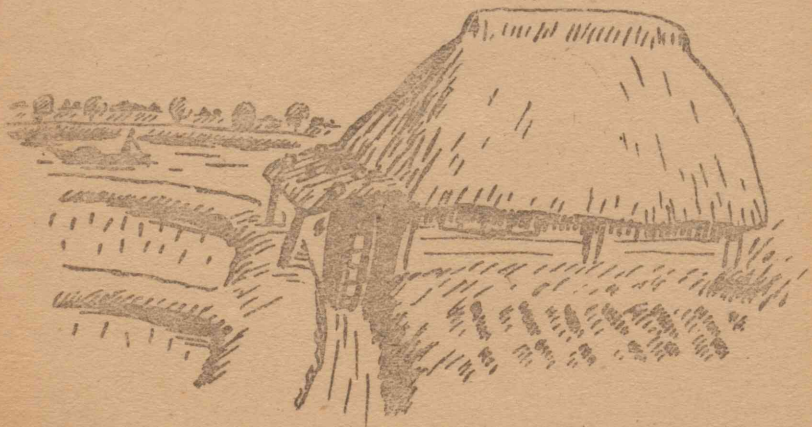


はたけにも水をまいていく。



川ははたらく

川は大きくなると、
ゆっくりにながれていく。
汽船や荷船がおる。
下水の水やうんがの水、
きたないどぶ水をながして、
海のおくにしていく。
川はだまってはたらく。



二 私の旅

(一)

「はいさん、汽車のきっぷかったの。」

「かったよ。さあ、改さつ口へいこう。」

パチン、パチン。

「はいさん、汽車がはいってきたよ。」

シュ、シュ、シュ。

「おりるかたがすんでから、ごじゅんにお乗りください。」

「さあ、じろう、お乗り。」

ポ、ポト、シュ、シュ、

シュ、シュ。

「どこかのおばあさんとぼっ

ちゃんが、乗ってきたよ。」

「じろう、せきをあけて、あ

のぼっちゃんをかけさせて

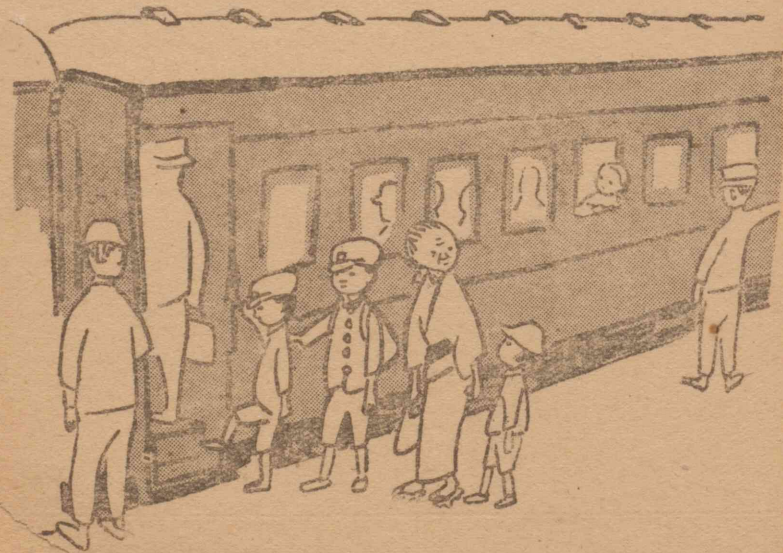
おあげ。」

「どうも、ありがとうございますい

ます。」

「おばあちゃん、海がみえる

よ。」



「きれいな海だこと、お船もみえますね。」

「おばあちゃん、まっくらになった。」

「トンネルですよ。ここは、みなさんで、苦勞をしてほめてくださったトンネルですよ。」

「もう明かるくなった。あ、あそこにきれいなさくら。」

「ずいぶん早いね、にいさん。」

「きかんしの人がいっしょうけんめいに走らせているからさ。」

「どこで走らせているの。」

「いちばんさきのきかん車の中さ。」

ビュトツ、ビュー。

「あつ、びっくりした。」

「むこうからきた汽車とすれちがったのさ。」

「じょうとつしたかと思った。」

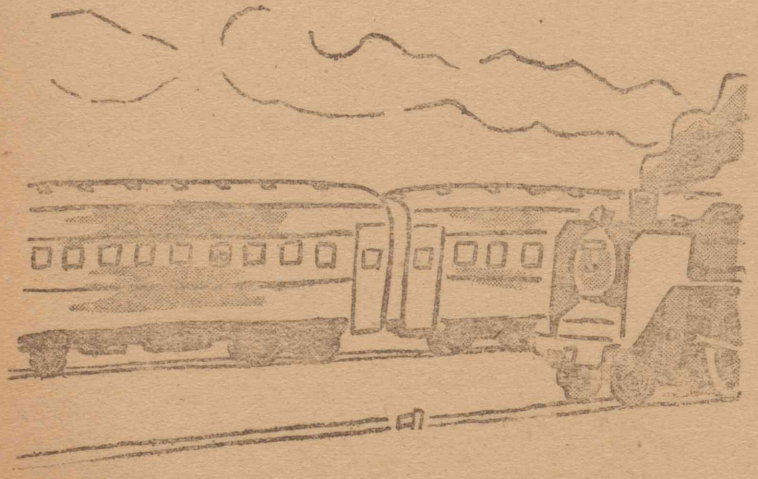
「そんな心配はいらない。駅

の人たちは、いつも氣をつ

けているよ。ほら、あそこ

をござらん。」

「あれ、なにかしら。赤と青のしるしのついたもの。」



あつ、びっくりした。

「シクナルだよ。あれをみて、汽車がとまったりとおつたりするのだ。」

「ぼうや、ここですよ。おりましよう。どうもありがとうございます。ごさいました。」

「おにいちゃん、ありがとうございます。」

「ぼっちゃん、さようなら。」

「さようなら。」

「きつぷをはいけんさせてもらいます。」

「にいさん、あのんだあれ。」

「車しようさんさ。」

「どうして、きつぷをみるの。」

「まちがって乗っている人がいないか、しらべるのさ。」

「ぼくたち、まちがっていないの。」

「だいじょうぶだよ。」

「はい。」

「どうもありがとうございます。このつぎの駅ですね。そうです。」

「やっどついた。わすれものはないか、じろう。ありません。」

どまってから、おりるんだよ。

「シュ、シュート、シュート。」

「にいさん、もうおりていいの。」

「いいよ。」

「おもしろかった。」

「きつぷを改さつの人におだし。」

「じろうちゃん、いらっしやい。」

「おばさん、こんにちは。」

「おばさん、わざわざきてくださって、すみません。」

(二)

私は、としおさんが、みつおさんにあてて書いた手紙です。私も、いまから旅にでかけます。

ゆくさきはむねのところを書いてありますから、まちがいはありません。けれども、このままでは旅はできません。切手をはってもらうのです。これは、汽車の旅にきつぷがいるのと、おなじことです。汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、私は、おなじりようきんで、どこへでも旅をすることができます。

では、としおさん、さようなら。

ポストにいれられると、友だちといっしょになりました。
そこへ、あつめる人がきて、

「さあ、このかばんにはいるんだよ。」

と、私たちをみんなかばんにいれました。

「きみは、どこへいくの。」

「ぼくは、さっぽろまで。」

「あなたは、どこまでいくの。」

「わたしは、かごしままで。」

こんな話で、かばんの中はにぎやかで、

すまもなく、私たちは、ゆうびんきょくの大きなはこの



中にはいりました。そこは私たちの山です。

「ねえ、きみ。ぼくは遠いところ

へいくんだけど、あて名の字が

そまつなので、わかりにくくて

心配さ。

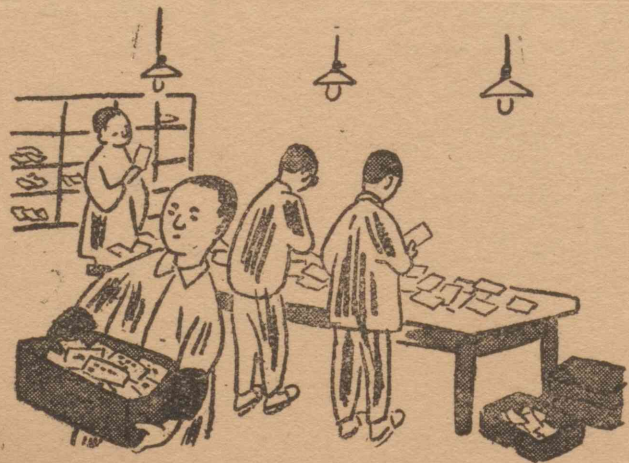
「わたしのはこんな小さな字だから、
なお心配ですよ。」

「あなたたちはまだいい。このわ

たしのをごらん。うそ字さ。わ

たしは、ちゃんとゆくさきは知

っているが、うそ字だから、とんでもないところにやら



れるかと思つて、びくびくしているところだよ。

そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、北の方へいく友だちと、南の方へいく友だちと、西の方へいく友だちと、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけてくれました。

「きようなら。」

「きようなら。」

「きようなら。」

おたがいに、であつたと思つたら、すぐおわかれてした。そこで、私たちは、じょうぶなふくろにいれられて、しつかりと、ふうをされました。こんなにだいにしてくれま

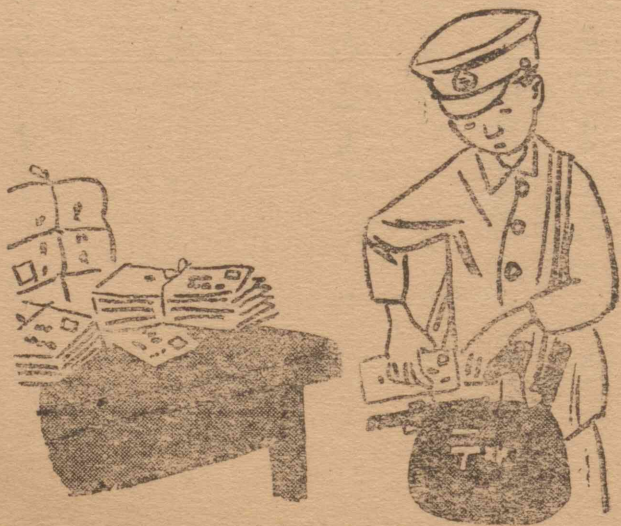
すから、おちる心配はありません。

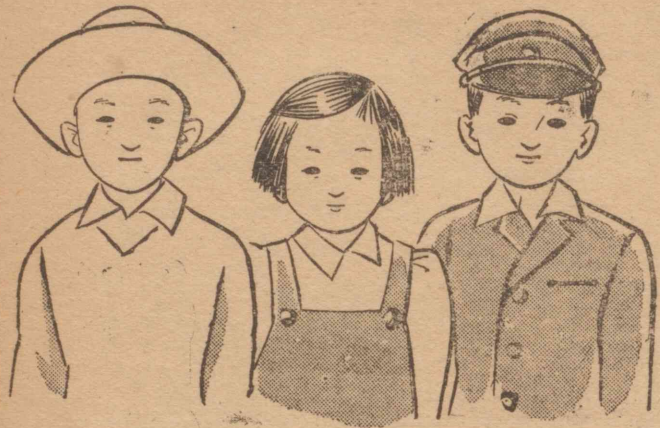
私たちは、汽車につまれて

どンドン、南へはこばれました。つぎのあさ、やっと汽車からおろされ、自動車につまこまれて、ある町のゆうびんきよくにつきました。

ふくろの中からだされて、ほっとしていると、こんどは、また、かばんの中に入れられました。

配たつをする人は、自てん車に乗って走りました。私の





三 ありがとう

ある日のゆうがたでした。一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。あまりこんでいましたので、みんな、ぶつぶつとこごとをいいながら、出口の方へでていきました。しかし、その中に三人だけ、たいへんよろこんで帰っていった子どもがありました。

なかまは、一けん一けんにくばられはじめました。私もその人の手ににぎられながら、あちらこちらへまわりました。しげった竹やぶの小道をとったり、すすしい川のきしを走ったりしました。

なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。
「ゆうびん。」

私は、その家のげんかんにおかれました。

「どしおくんから手紙がきたよ。」

みつおさんがよろこんで、私を手にとりあげました。私は、ぶじに、どしおさんの心を、そのままみつおさんにおつたえすることができました。

いちろうさん

いちろうさんは、おかあさんのさとの、いなかにいきました。ひさしぶりにおじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ白にこなふいたほしがきなどをいただいて、たいへんかわいがられました。しかし、きょうのうれしさは、それだけではありません。

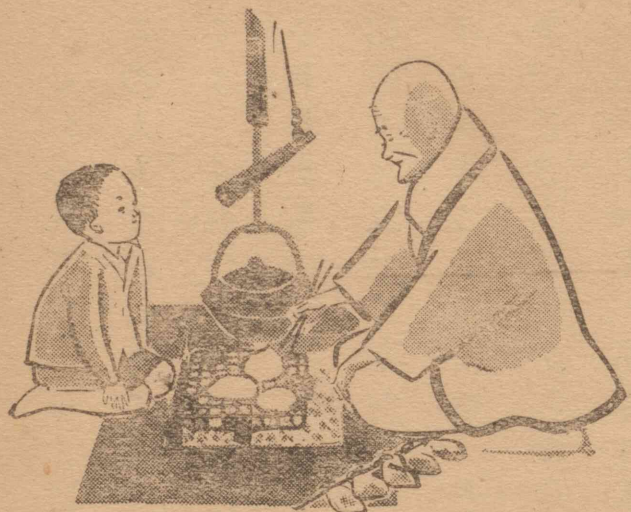
いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、げんかんにむかえにできました。

「きょう、ぼく、とてもうれしかった。」

「おじいさんが、かわいがってくださったのでしよう。」

「それもあるけど。」

「まだほかにあるの。どんなこと。」



「あのね、帰りの電車はとてもこんでいたんです。それで、どこかのおばあさんのよこのところに、もたれかかっていると、こしをかけていた知らないおじさんが、おりるとき、『ぼっちゃん、おかけなさい。』といって、かけさせてくれたんです。」

ところが、ぼくのまえに、まつばづえをついた、わかい
人がいるんです。ぼくは、はっと思つて、すぐ立つて、
その人をすわらせてあげました。」

「そう、それはよかつたね。それでうれしかったの。」

「それもあるけど。そうしたら、ひとりの人が立ちあがって、
男の人は立つて下さい。」といつて、みんなを立たせ、
不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

そのとき、どこかの女の人が、ぼくに氣がついて、

「ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。」

といつて、せきをすこしあげてくれました。
けれども

「ぼくは、もう大きいんですから。」

といつて、どうとうかけなかつたの。

「それでうれしかったのね。」

「ええ、はじめは、電車の中は、まるでにらめっこをして
いるようだったのに、それから、みんなにここにこして、
友だちのようになかよくなってきました。ほんとうは、
それでうれしかったんです。」

はるこさん

はるこさんも、ここにこして帰ってきました。駅の出口ま
でくると、でむかえにきていたおねえさんをみつけました

「ただいま。」

「しんきちが、早かったね。」

しんきちくんのおとうさんは、店で

そろばんをはじいていました。

「ぼく、きょう、とてもうれいんです。」

「どうしたのだね。」

「ぼく、こんな本をもらいました。」

「先生からかい。」

「いいえ、むこうの店に品物をとどけて、

受けとりをもらって帰ってくる

とちゅう、よその人からもらったんです。」

「まあ、受けとりをおみせ。——よしよし。それから、う

れしかったというのとはどんなことかね。」

「それはこうなんです。店をでてすこしくると、どこかの

おじさんが、荷物を二つ持って、あせをふきふきあるい

ていました。一つは大きくて、ぼくなんか、とても持

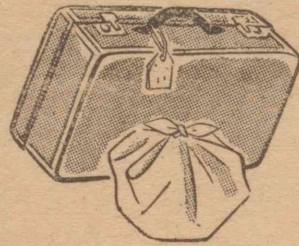
てそうもない物、一つは小さくてかるそうな物です。」

そこで、ぼくは、

「おじさん、駅へおいでになるのでしよ

う。ついでですから、一つ持っていっ

てあげましょう。」



どいいました。



「ありがとう。しかし、きみは小さいから、まあいいよ。」
「だいじょうぶです。ぼくにも持てそうですから。」
「だって、小さいほうの荷物を、わたしてもらいました。その荷物は小さいわりに、なかなかおもかったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていきました。駅につくと、その人は、

「ありがとう。ありがとう。ほんとうにすまなかつたね。きみは、ときどき、こういうことをやるのかね。」

ときいたので、ぼくは、

「いいえ、はじめてです。まえからも、やりたいと思っ
ていましたが、なかなかできなかつたのです。ぼくに

はすこしおもかつたんですが、とてもうれしいんです、
これからも、いつもやりたいと思います。」

「いいました。すると、その人
は、トランクからこの本をだし
て、

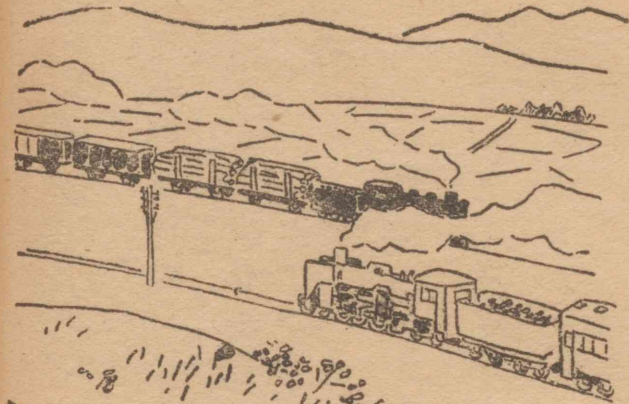
「これには、きみのようないい
子どものことが書いてありま
すよ。」

「だって、ぼくにくれました。
それで、ほんとうにうれしいん
です。」



四 石炭

ジュツジュツ、ポッポ、シュツシュツ、ポッポ——

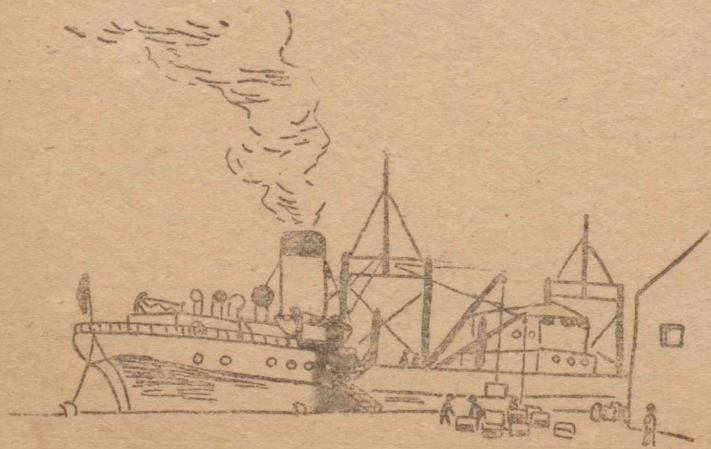


汽車が走っています。まっ黒なけむりをもうもうとはいて、どンドン走っています。おや、むこうからも長い、長い貨物列車がやってきます。材木や、石炭や、お米などを、たくさんつんでいるのです。この汽車は、なにをたいて走っているのでしょうか。

これは貨物船です。かんぱんのクレーンが、あがったりさがったりして、荷物をつみこんでいます。この荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゆなどがはいっています。

船は、なんの力で走るのでしょう。

えんとつがたくさん立っています。どのえんとつからも、けむりが、むくむくとたちのぼっています。

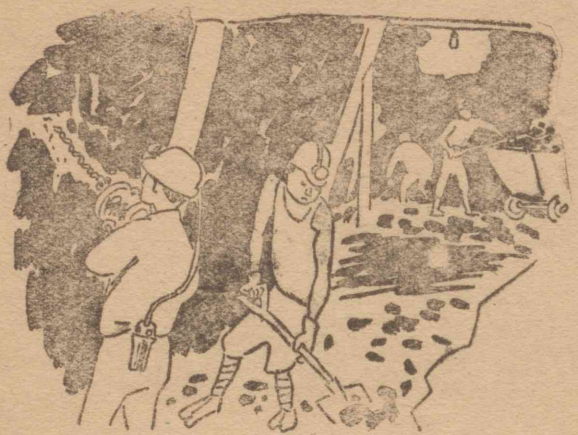
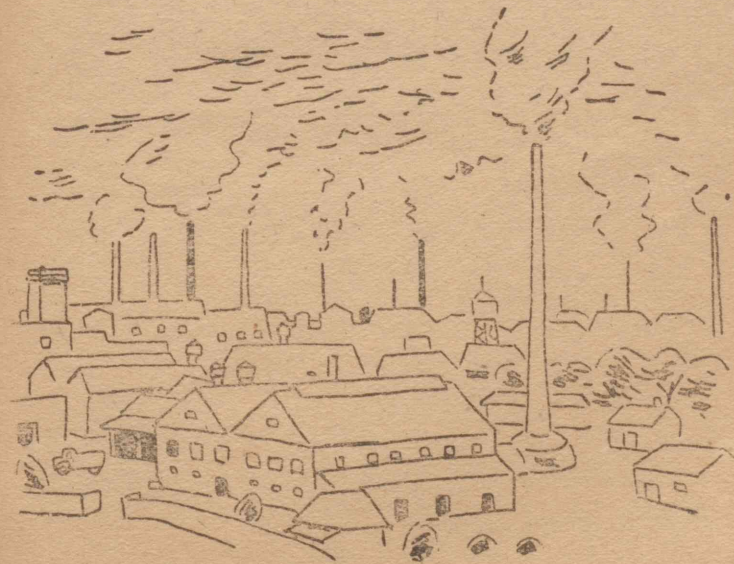


ここは工場町です。ここで
 きかいや、ひりょうなど、た
 いせつな品物を作っています
 この工場のきかいを動かして
 いる力は、なんでしよう。

○
 おかあさんが、だいどころ
 で、ごはんのしたくをしてい
 らっしゃいます。

ガスこんろにかけたかまや
 なべから、ゆげがふきでてい

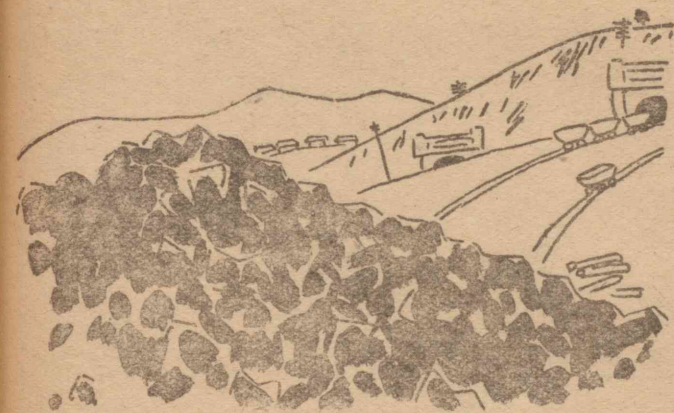
ます。ガスこんろの青い火は、ガスがもえて、いるのです。
 あのガスは、なにかから作るのですしう。



○
 なにをしているところではしう
 これは、石炭をほっているところ
 です。まわりのかべに、石炭がで
 ています。さかんに、きかいで石
 炭をくずしてとっています。
 とれた石炭は、トロッコにつん
 で、そとへはこびだします。

ほりだされた石炭が、山のようにつまれています。この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場のきかいを動かすのです。

ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろいろのくすりも石炭からとれます。私たちは、石炭なしには、くらすことができません。では、石炭は、どうしてできたのでしょう。



みえませぬ
みなれない木や、草や、動物が

これは大むかしのけしきてす。このような木が、たおれて土にうずまり、長いあいだかかって石炭になったのです。大むかしのたいよりのねつが、かたちをかえ、石炭の中になくわえられていて、いまそれが、私たちのために、生き返ってはたらいているのです。



五 心と心

(一)

けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生をしていらっしやるのです。手紙の中に、こんなことが書いてありました。ぼくも、三年生を受け持っている。こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、それを送ってあげよう。そうすれば、こちらのようすが、いろいろとわかるだろう。

(二)

ほっかいどうは、いまがいちばんたのしいときです。冬がすぎ、春がきたからです。山のてっぺんには、まだ雪がのこっています。けれども、中ほどから下は、雪がありません。山の木のめがはじめました。ふもとになるにしたがって、木のみどりがこくなってみえます。茶色の木のめもみえます。このきれいなけしきを、みなさんにおみせしたいと思います。



○
こちらでは、さくらの花も、なしの花も、すももの花も、うめの花も、りん

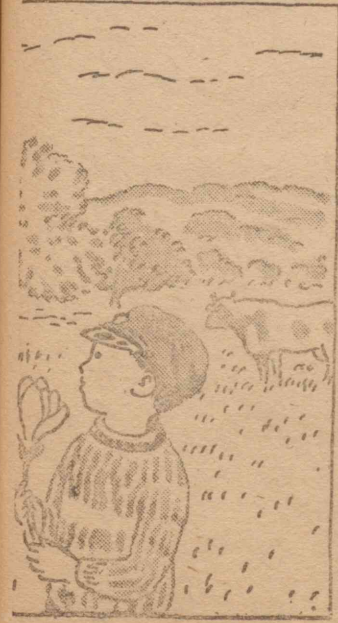
この花も いっぺんにさきだします

きゅうにあたりが美しくなると、私は、なんだか、ほんやりするほどたのしい氣がします。

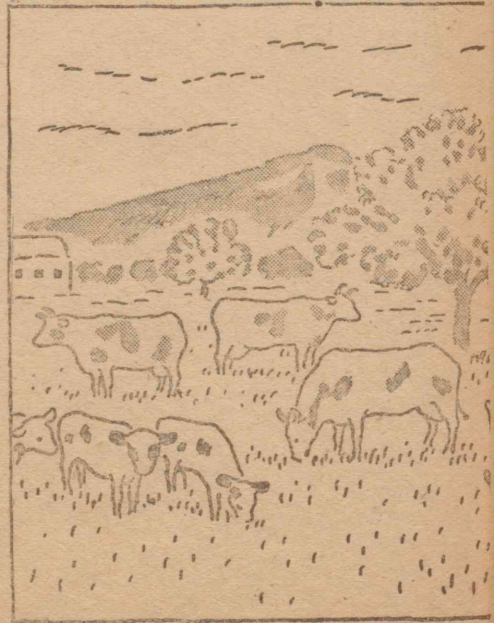
私のすきな花は、こぶしの花です。白くてゆったりとさく、ひんのいい花です。この花がよくさく年は、ほう年だといえます。いま、たくさんさいています。

○

ぼくのうちには、うしが十三とういます。白黒ぶちのちちうしです。なかに、子うしが三とういま



す。けさも、まきばにだしてやりました。のびはじめた草の上を、うれしそうにあるいていました。子うしは、小川の岸をどこどこ走りました。まいにち、たくさんちちをしぼります。



(三)

ほっかいどうのみなさん。このあいだは、お手紙ありがとうございました。こくばんのと

ころにならべてあります。私は、まだ、ほっかいどうへ
いったことはありません。けれども、お手紙でよくわか
ります。ひろびろとした、

きれいなところだと思ひます。
ほんとうに、一どいってみた
いと思ひます。

○
こちらでは、田うえがはしま
りました。私は、なえはこび
をしています。つばめが、私
のすぐ目のまえを、いったり
きたりします。一日じゅうて



つたいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらく
なっています。きのう、はじめてほたるをみかけました
そちらでも、ほたるはとびますか。

○
ぼくのねえさんは、あさひがわへおよめにいっています。
ぼくはねえさんから、よくうたをおしえてもらいました。
ねえさんはいい声でした。ぼくのうちは花屋です。です

から、花ばたけで、よくいっしょにうたい
ました。ぼくのすきな花は、あさがおです。
空色のあさがおです。それから、まっかな

カーネーションです。そのたねをこんどお送りします。

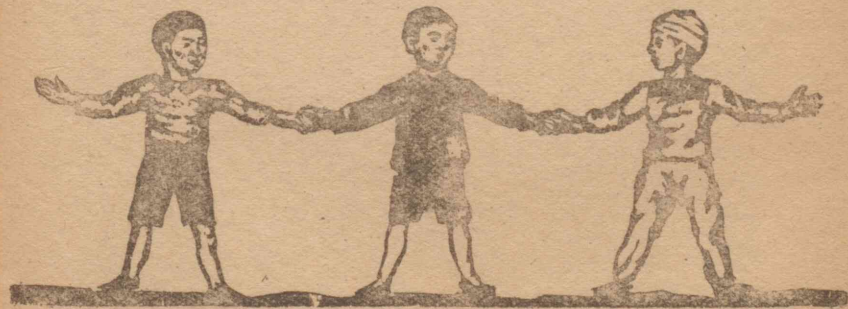


六 まどをあけると

日本の子ども

ぼくら、日本の子どもらは
はとだ。平和のはとだ。

世界の友よ、手をつなぎ、
なかよくとんであそぼうよ
明かるい世界の空とんで、
平和のうたをうたおうよ。



ぼくら、日本の子どもらは
つぼみだ。きれいな花だ。

世界のそのにさきにおう、
きれいな花のその一つ。
みんななかよくさきそろうい
世界の花ぞのかざろうよ。

ぼくら、日本の子どもらは
星だ。光った星だ。
世界の空のかず多い
かがやく星のその一つ。



みんななかよくきらきらと、
しずかな空で光ろうよ。



やぶうぐいす

おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそば
を通ったら、おくの方でうぐいすの聲がした。

「ホーケ、ホーケ」というようにきこえた。

たちどまると、鳴き声がやんだ。

しばらくすると、また「ホーケ」と鳴いた。

春になったばかりだから、うまく鳴けないのだから

帰りに、また通ったら、もう鳴いてはいなかった。

たのしい小道

いつも通るこの小道

たのしい小道だ。

ひとりで通るときも、

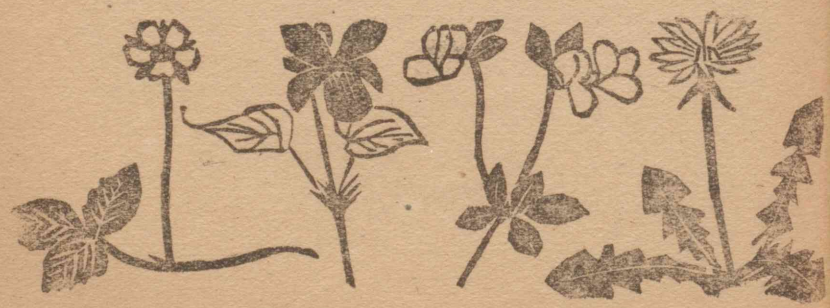
みんなで通るときも、

たんぽぽがさいっていたり、

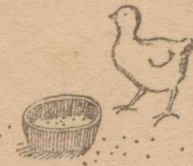
すみれがさいっていたり、

名まえは知らないが、

きれいな花がさいっていたり。



おや、こんな花が——
またみつけた、きれいな花を
いつ通っても、いつもたのしい
この小道



まどをあけると

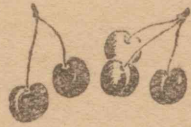
まどをあけると、

いまのぼったばかりの日の光が

きつといっぱいながれこんできた。

いい氣持がして、たのしくなった。

あさの光に、身をきよめるのはうれしい。



わたし船

のたりのたりとわたし船
なの花ざかりの岸をでる。
子うしが水のみ岸をでる。

のたりのたりとわたし船
かふんやそよ風のせてでる。

子どもや荷物のせてる。

のたりのたりとわたし船
おもさにゆれゆれ岸をてる。
かげをちらして岸をてる。

海へ

がけの下には

白いはま
白いはま。

あみひく人の

黒いかげ
黒いかげ。

島をとりまく

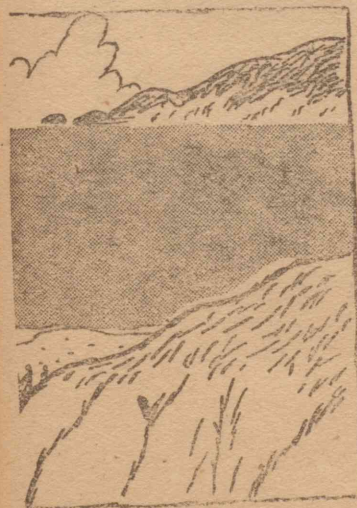
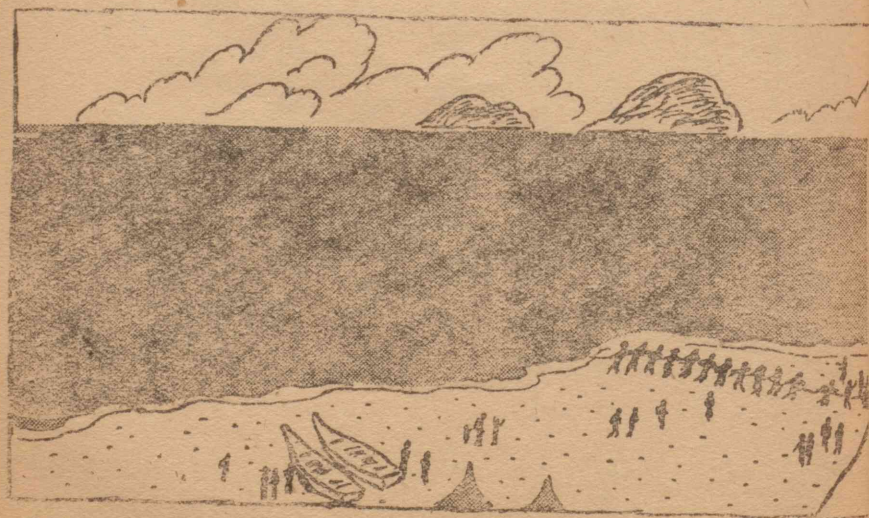
青い海
青い海。

きてきも鳴らさず

船がいく
船がいく。

海のはてから

白い雲
白い雲。



ひつじになって

わいてくる。

わいてくる。

七 星



ゆうごはんをまつあいだ 私は まさこ
をうば車に乗せて、はるおと大通りにで
ました。いそがしそうに人々が通ります。

「こんばんは。」

と、あいさつをしていく人もあります。まさこが

「あれあれ。」

というので、西の方をみると、日がしずんでまもない空に
大きな星が光っていました。

「まさこちゃん、一ばん星みつけたのね。えらいわね。」

と、手をつたいてやりますと、まさこも、まるくふ
とった手をたたきました。

「二ばん星みつけた。」

大きな声で、はるおが、東の空をみながらいいました。

「ああ、あれね。だいたい色の大きな星だこと。」

それは、南東の空で光っていました。

「三ばん星は、ねえさんがみつけたいわ。」

そーいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光つ

ていました。

「あれ、三ばん星。」

「なんだ。あんな小さいの。それより、ほら、もっともっ

と高いところに、四ばん星——赤い星。」

「ほんとうに、はるおさんは目が早いのね。」

そこへ、となりのごろうさんが、かけよってきて、

「五ばん星、あんなところ。」

空のまん中に、大きな星が光っていました。

それから、あたりをみまわしましたが、空は、まだ、ほ

んのりと明かるくて、つぎの星をみつけることは、できま

せんでした。まさこをおかあさんにわたして、食事をすま

せてから、またちょっと、家のまえにてってみました。三十

分ぐらいしかたっていないなかったのに、もうすっかりくらく

なっていて、空いちめん、星がでていました。

「さっきみつけた星は、どれだったかしら。」と、思って、西

の空をみましたが、わかりませんでした。

そこへ、受持のやまもと先生がおいでになって、

「今夜、学校のにわで、ほうえんきょうで星をみせますよ。

いってみませんか。」

と、さそってくださいました。

私は、おかあさんにこのことをいって、ごろうさんをさ

そって、はるおといっしょに、学校へいきました。もう、

たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。

「今夜みるのは土星です。あそこに大きく光っている星ですよ。」

私は、

「はるおさん、ほら、あなたのみつけた二ばん星よ。あれ土星というのよ。」

「じゅんばんがきたので、みせていただききました。」

「みえる、みえる。まん中にまるいきれいなたまがみえるそのまわりに、うすい、大きな、麦わらぼうしのつばみたいなものもみえる。きれいだこと。」

「ねえさん、早くみせて。」

「はるおにさいそくされて、ばんをゆずりました。はるお

は、のぞいていましたが、かげんがわからないようです。」

「あわてないで、しずかにごらん。」

「私は、こういって、はるおのかたをそっとおさえました。」

「あつ、でた、でた。」

「あんまり大きな声をだしたので、あたりの人がわらいました。」

「ねえさん、あれが星なの。」

「星ですよ。」

「へんなもんだな。おもちゃみたいだ。」

「また、みんながわらいました。」

「あんまり長くみていないで、さあ、おかわり。ごろうさんにおみせなさい。」

はるおは、まだみていたいようでしたが、やっと目をはなして、ばんをごろうさんにゆずりました。

「ほんとうにきれいだな。なんだが、青い、青い水の中にういているようだ。」

「ほんとうに、夜の星ってきれいなものね。」

「あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。」

私たちは、まもなく帰ってきました。ごろうさんは、

「ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな。」

「いいました。するとはるおも」

「ぼくも。」

「いいました。」

私は、いまみてきた土星を、紙にいていねいにかいておこうと思いました。

八 あさがおの花

かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。どれも空色です。あやこは、それをみつけて、

「おかあさん、あさがおがさきましたよ。」



といたしました。

「ほんとうに、きれいにさきましたね。いい色ですこと。」

「あの三つの花が、そろってしんこきゅうしているように
みえますね。」

「あとで写生してごらん。おまえが、たねをまいたのでし
たね。」

「そうです。この春まいたので
す。たねをまいたから、こん
なにさいたのですね。」

「でも。」

「でも——って、なにが、おか



あさん。」

「でもね、そのたねからめがで
なかつたら——」

「めがてないことはありません
わたしが水をやっただんですも
の。」



「それでも、まいにちあのつるをのばしたのは、だれかし

ら。あやこさんがひっぱったの。」

「いいえ。」

「あのつぼみをこしらえたのは、だあれ。」

げさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。

「花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。」

あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなってしまいました。

あさごはんするとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

「きれいなきゅうりね。おかあさん。」

このきゅうりだって、あさがおとおなじですよ。たねはおかあさんがまいたのだけれど、こんなによくできたのは、おかあさんの力ではありませんよ。」

だって、おかあさん。こやしをやったり、手をやったりしたじゃありませんか。

せわはしてやりました。けれども、花がついたり、みになったりしたのは、おかあさんのせいではありませんよ。おとうさんは、この話をそばでおききになって、

あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。と、おわらいになりました。

生まれたときは、ねてばかりいたのが、はうようになり、立つようになり、あるくようになって、いまは、もうこんなに大きくなった。

あさがおやきゅうりは、自分ひとりで、大きくなったの

てしょうが、わたしは、おとうさんやおかあさんの力で、

大きくなったと思います。

「生まれたときからせわはしてきたが、日に日に大きくなったのは、おまえひとりの力でもなければ、おとうさんやおかあさんの力でもない。」



「おとうさんも、おかあさんも、こうして、まいにち、たっしやで生きていけるのは、だれのおかげだろう。」

九 金のさかな

海べに、おじいさんとおばあさんが、住んでいました。ふたりは、ふるい小さな家に住んでいました。

おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくらししていました。

ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。すると、



金のさかながかかってきました。

金のさかなは、

「おじいさん、わたしを海へはなしてください。お礼はたくさんさしあげます。」

といました。

おじいさんは、

「金のさかなさん、早くお帰り。」

とやさしくいって、はなしてやりました。おじいさんはうちへ帰って、「おばあさんに、このふしぎな話をしました。わたしは、きょう、金のさかなをとったよ。それが、海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげるといったが、わたし

はお礼などもらわなかった。そうして、青い海へはなしてやったよ。」

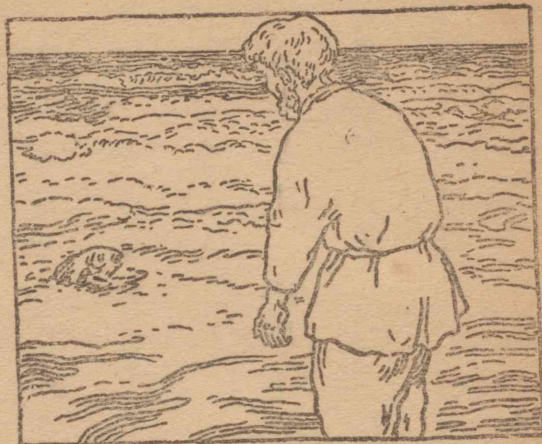
おばあさんは、

「どうしてお礼をもらわなかったの。せめて、おけの一つも、もらってくればよかったのに。うちのおけは、もうすっかりこわれてしまっているんだもの。」

といました。

あくる日、おじいさんは海へやってきました。海はすこしあれていました。おじいさんが金のさかなをよびますと、すぐでてきて、

「なんの用ですか、おじいさん。」



とききました。

「金のさかなさん、おばあさんが、新しいおけがほしいといっています。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。帰るまでには、新しいおけができていますよ。」

おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、新しいおけを持っていました。ところが、おばあさんは、

「こんなおけなんて、とくにもならない。もう一ど金のさかなのところへ行って、家をもらっておいで。」

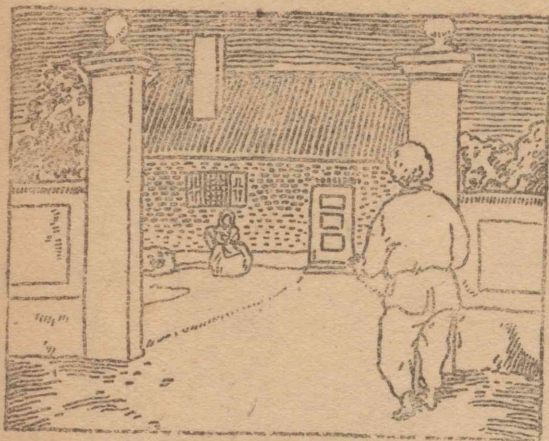
おじいさんは海へやってきました。海はにごっていましたが、おじいさんが金のさかなをよびますと、およびてきてきました。

「なんの用ですか、おじいさん。」

「うちのおばあさんは、家がほしいというのです。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。家はちゃんとできていますから。」

おじいさんが帰ると、りっぱな家がたっていました。



おばあさんは
金のさかなのところへ行って、たのんでおくれ。わたし
は、ひやくしようなんか、もういやになったから、お金
持のおくさんになりたいって。

といました。

おじいさんは、また海へやってきました。海はあれてい
ました。

おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかながお
よいできました。

「おばあさんは、もうひやくしようはいやになったから、
お金持のおくさんになりたいというのです。」

「おじいさん、心配しないで、お帰りなさい。」

おじいさんがおばあさんのところへ帰りますと、おばあ
さんは、けがわのふくをきて、ぴ
かぴか光るずきんをかぶり、金の
うでわをはめ、赤いくつをはいて
いました。めしつかいたちもいま
した。

おじいさんが、

「お金持のおくさん、これであな

たもまんぞくでしよう。」

といますと、おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし



ごとにおいやりました。
それから三日ほどたって、おばあさんはおじいさんにい
いました。

「金のさかなに、わたしは金持のおくさんもいやになった
女王になりたいってたのんでおくれ。」

おじいさんはびっくりして

「おばあさん、氣でもちがったかね。女王さまのようなあ
るきかたも、口のききかたも知らないで——國じゅうの
ものわらいになるよ。」

「おまえさん、ぐずぐずいわずに海へいっておいで。」

おじいさんは、とぼとぼと海へやってきました。海はま

っ黒になってあれていました。おじいさんが金のさかなを
よびますと、金のさかなは、

「なんの用ですか、おじいさん。」

とたずねました。

「金のさかなさん、おばあさんは、もう金持のおくさんは
いやだ、女王になりたいといっています。」

「おじいさん、心配しないでお帰りなさい。おばあさんは
女王になりますよ。」

といいました。

おじいさんが帰ってみると、どうでしょう、ちゃんどご
てんができていて、おばあさんは女王になっているではあ

りませんか。そばには、りっぱなけらいもついています。

おじいさんは

「女王さま、これで、あなたも

ごまんぞくでございましょう。

といました。

おばあさんは、おじいさんに

は目もくれないで、けらいに

「あちらへつれていけ。」

といいつけました。

それから一週間もたったころ、

おばあさんは、おじいさ



んをよんでいいました。

「金のさかなにたのんておいで。

った。こんどは、海のぬしに

なりたい。あのひろい海で、

金のさかなをけらいにしてや

りたい。」

おじいさんは、口ごたえもて

きず、力のない足どりで、海へ

やってきました。

海はまっ黒になって、波が高

く、ゴーゴーとうなっています。



わたしは女王もいやにな

おじいさんは金のさかなをよびました。
金のさかなは、でてきていきました。

「なんの用ですか、おじいさん。」

「うちのおばあさんは、もう女王
はいやだといっています。海の
ぬしになりたい、ひろい海で、
あなたをけらいにしたいといっ
ています。」

金のさかなは、なにもいわない
で、しっぽでピシヤリと音をさせ
て、海の中へおよいでいってしま

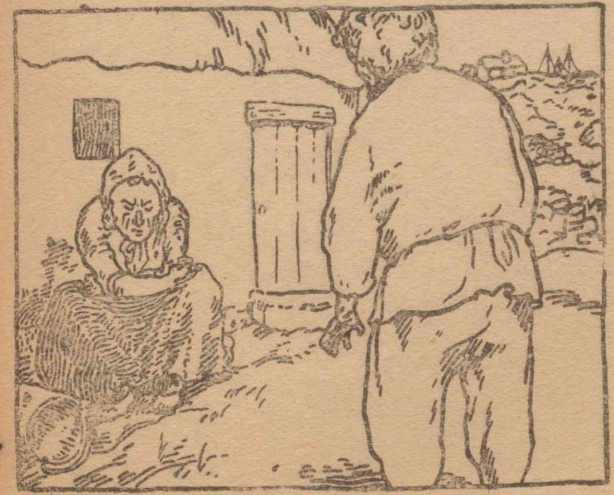
いました。

おじいさんは、すごすごと、おばあさんのところへ帰
りました。みると、まえに住んでいた、ふるい小さな家がた
っていました。入口におばあさんがすわっていました。こ
われたおけが一つ、ころがっていました。

十 学級日記から

七月十一日 月

先生のつくえのかびんに、大きなひまわりの花が、三本
かざってありました。かおよりも大きな花です。先生が、





「やあ、きれいですね。だれがいけてくれたのですか。ごこのずが工作の時間に、写生しました。」とおっしゃいました。ひまわりの花は、いけださんが自分のうちのわから、持ってきてくれたのでした。これで教室が明るくなりました。

七月十二日 火

きょう、先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流

れている小川のところにいきました。そうして、川をみて氣のついたことを書きました。

つぎのような文が、はりだされました。

「チョロチョロ、ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。」

「おなじところで、いつまでも高く鳴っています。」

「ピシャピシャと、あがったりさがったりして、流れています。」

「川の中の石が、のびたりちんだりしています。」

「葉のかげぼうしが、魚のようにおよいでいます。」

「川から水がわきあがってくるようです。」

「波が、すべりたいをすべるように、らくらくと流れてい

きます。

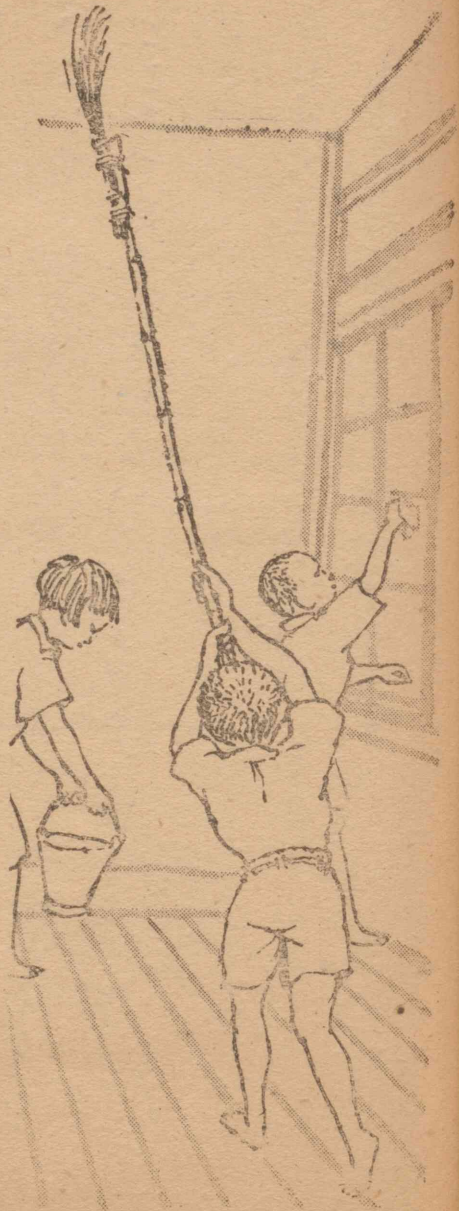
「川の中の石と石とが、おどっています。」

「水が光って、とんではねています。」

「水の音をきいていたら、せなかがあつくなってきました。」

七月十三日 水

きょうは大そうじをしました。ゆかをきれいにふきました。かべいたもふきました。竹のさきにはうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいました。むすびめがとけて、ほうきがおちました。それが、にしみさんのせなかにあたりました。にしみさんはびっくりして、「キヤ



ア。」と行ってとびあがったので、みんなわらいました。ガラスもきれいになって、そとのけしきがよくみえました。

七月十四日 木

きょうは五人も休みました。

どうして、きょうはこんなに休んだのでしょ。みんな
からだに氣をつけてください。じゆくさないものをたべ
ないようにすること、夜は、はらまきをきちんとして、
ねびえをふせぐこと、それから——」
と、先生がおっしゃいました。みんなは、なま水をのまな
いことや、ねるまえにたべないことや、日のかんかてる
ところで長くあそばないことなどを、話しあいました。

七月十五日 金

先生のお友だちが、学校をみにいらっしやいました。そ
うして、私たちの教室にもおいでになりました。そのお友

だちが、記念に写真を写したいとおっしゃいました。そこ
で、おひる休みするとき、私たちは、運動場にあつまって、
先生をまん中にしてならびました。

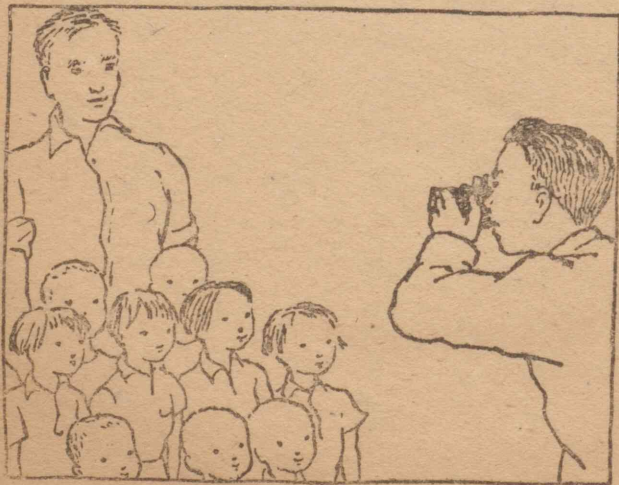
先生のお友だちが、

「いいですか、写しますよ。」

とおっしゃったとき、だれかが、

「うふふ。」

とわらいだしたので、みんな、い
っぺんにわらってしまいました。
そこをパチリと写されました。



七月十六日 土

夏休みになにをするか、みんなて話しあいました。

たかぎくんは、え日記を書くといいました。

たなかさんは、おしげをたくさん作るといいました。

ささきくんは、星をしらべるといいました。

いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書く

んだと、いって、よろこんでいました。

いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音
にわけてみるといいました。

それはおもしろい。いのうえさんの字びきができますね

と、先生がおっしゃいました。

十一 りょうかんさん

「子どもたちがくるまでに、そこらをきれいにそうじして
おこよう。」

りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木
の葉をはきよせました。そこへ、村の子どもたちが、

「りょうかんさん。りょうかんさん。」

とよびながら、走ってきました。

「おお、みんなそろってきたな。おや、おまつさんがいな

い。どうしたのかい。」

「おまつさんはあとからきますよ。」

「ああ、そうか。」

そのとき、下の方から、

「りょうかんさん、りょうかんさん、おしろうさんのりょうかんさん。」

と、うたのようにふしをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

りょうかんさんは、ほうきの手をとめて、

「おまつさんが、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。」

「りょうかんさん、このおにんぎょう、かわいいでしょう。」

「これはかわいいにんぎょうだ。黒いかみのけがふさふさ

して、まるい目が二つあって、

「どのおにんぎょうでも、目は二つですよ。」

「わしは、三つも四つもあ
るかと思っていたよ。あ

はははは。」

「おかしいわ。目が四つも
あっちゃ。」

「このおにんぎょうは、き
れいな赤いおびをしめて
いる。いいおびだ。わし
もほしいな。ちよつとか



しておくれ。

でも、おぼうさんが赤いおびをおしめになると、へんてしよう。

「なに、へんじゃない。黒いころもに赤いおび——かわいいよ。」

「あら、おかしいわよ。」

「きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。さあ、ここへおいで。」

子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。

「こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それ

から、うたをうたうのだよ。

高い山からたにをこみれば

うりやなすびの花ざかり

あれは、よいよいよい。

これは、よいよいよい。

うらの山から海べをみれば

波にうかんださどが島。

あれは、よいよいよい。

これは、よいよいよい。

ひとりの子どもが、

りょうかんさん、いま、さどが島とおうたいになつたとき、おじぎをなさいましたね。あれはどうしてですか。」とたずねました。

「わしのおかあさんはな、ずっとまえに、さどが島においてなされたことがあった。それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。」

「おぼうさんにおかあさんがあるって、おかしいな。」

「なにがおかしいものか、このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアとないたのだよ。それからな、おかあさんのおちちをコップコップといただいて、こんなにおぼうさんになつたのだよ。」

こういってから、りょうかんさんは

「さあ、みんなこちらへおいで。」

と、おくぎしきにつれていきました。

「それ、このたけのこをごらん。」

みると、ぎしきのまん中のたたみをやぶって、のびているたけのこがありました。

「このたけのこが、えんの下にあたまをだしたので、おまえは水がほしいのか。」とたずねると、「水をください。」というのだよ。それで、手おけの水をかけてやると、たけのこがよろこんで、のびるわ。のびるわ。のびて、のびて、とうとうゆかいたで、あたまをコツンとうったのだよ。」

よ。そこで、ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあるなをあけてやったら、それ、このとおり、いせいよくのびるわ、のびるわ。

みんな、もっとまえへでてごらん。それ、たけのこにごはんつぶがついてるだろ。それぞれ、たけのこにごはんのつぶが——こりゃあ、たけのこごはんだよ。

「あら、りょうかんさん、ちがいますよ。ごはんの中にたけのこのはいつているのが、たけのこごはんですよ。」

「いや、たけのこにごはんつぶがついてるのが、たけのこごはんだよ。」

「ちがいますよ。」

「わからない子どもたちじゃな。」

「わからないおぼろさん——」

子どもたちは、みんな帰っていきました。りょうかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくってから、

「どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。」

と、手おけをさげて、うらのいどばたに立ちました。むこうの山から、大きな月がのぼってくるどころでした。

「ああ、きれいなお月さま。」

りょうかんさんは、いつまでも月にみとれていました。

十二 ひわの子

さんちゃんが、友だちと、山へわらびをとりにいきました。その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろいました。ひなはたいそう小さくて、元気がなく、死んだようになっておちていたのです。

「これ、なんのひなだろう。」

「すずめの子らしいね。」

「ひばりかもしれないよ。」

「ちっとも動かないじゃないか。」

「かわいいそうなもの、ひろっていい。」



「って、かってみよう。」

「さんちゃんがひろって帰ると、おとうさんが」

「すりえをこしらえて、たべさせてみよう。」

とおっしゃって、たまごのきみですりえをこしらえて、たべさせてやりました。

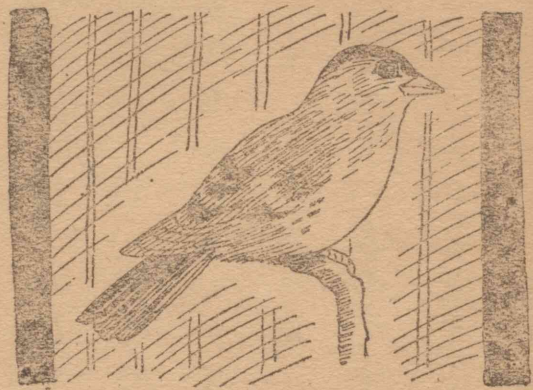
しなは、みちがえるように元気がでて、だんだん大きくなりなりました。

「ああ、よかった。おとうさん、ひとりでとべるようになるまで、かってやりましようね。」

「さんちゃんは、大よろこびでした。ひなはすずめではありませんでした。ひばりでもありませんでした。あたまから」

せなかにかけて、き色がかった美しい鳥になりました。
「これはめずらしい。ひわの子ですよ。こんなに、げんき
でそだったのだから、いまに、もっとはね色もきれいにな
り、いい声でさえずりますよ。」
ど、となりのおじさんがおしえてくれました。
夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をどびま
わっていました。

「おとうさん、ひわは自由にとべるようになりましたね。
かごからだして、にがしてやりましようか。」
「まだすこし早いようだ。自分でえさをとったり、遠いと
ころまでとんでいくことはできませんよ。」



「じゃあ、もうすこしね。」
そういつているうちに、秋に
なりました。まいにち、わたり
鳥のむれがとんできます。
その中には、ひわのむれもあ
りました。さんちゃんのおうち
のまつの木にとまったり、かえ
でのえだで休んだりしていきま

した。

「チュイン、チュイン、チュイン、チュイン、
チュウチン、チュウチン、チュウチン、
チュウチン、チュウチン、チュウチン、
チュウチン。」

ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声だと思ひました。そうして、

「チュイン、チューイン、チューイン。」

こんなふうに、自分でもさえずりはじめました。

いちばんはじめに、それをおかあさんがききつけました。

「ひわが、いい声でさえずりはじめましたよ。このままかっっておいたらいいでしょう。」

でも、おかあさん。あした山へつれて行って、はなそうと思っっているのです。」

そのばんのことでした。バタバタと音がしましたので、

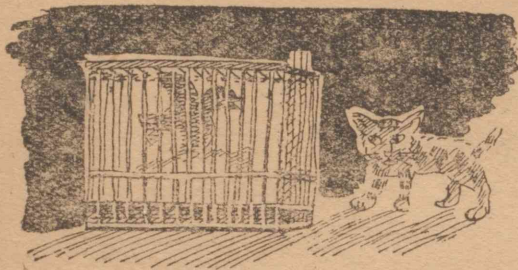
みんながとびおきしてみると、どこかのねこが、しのびこんで、ひわをとろうとしていました。

「ジッ。」というど、ねこは、おどろいてにげて行ってしまいました。ひわは、かたのところをにけがをして、ころがっていました。さんちゃんたちが水をふきかけたり、くす

りをつけてやったりしますと、やっと生き返りました。二三日すると、ひわは、もどのように元氣になって、かごの中をとびまわっていました。

「もう、元氣になったようですね。」

「いや、この鳥はとべなくなったらしい。にがしてやれなくなったよ。」



おとうさんにいわれて、よくみると、ねこにびっかかれた
 はねがぶらりとなって、半分しかひろげられません。
 「ひわさん、これからぼくの子だよ。いつまでもかわいが
 ってやるよ。山へはなしてやりたかったんだけど。」
 さんちゃんは、ひわによくいってきかせました。ひわは、
 「チュイン、チュイン、チュイン。」
 と、人なつっこい声で鳴きました。

さんちゃんがべんきょうをはじめると、ひわは、
 「チュウチュウジ、チュウチュウジ、チュイン、チュ
 イン、チュウチュウジ、チュウチュウジ。」
 と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をま

ねます。



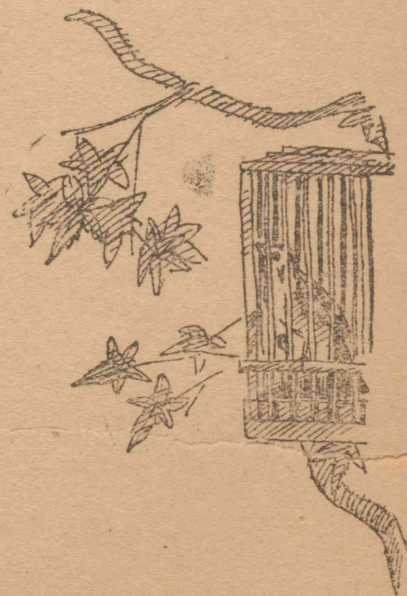
さんちゃんが、ハーモニカをふきはじめる
 と、ひわもよろこんで、
 「チュイン、チュイン、チュウツチン、チュウツ
 チン。」

と、早くおそく、高く、ひくく、いっしょ
 うけんめいにまねをします。

鳥かごは、おひるまえは、水道
 のあるいどばたの高いところにか
 けますが、おひるすぎには、かえての木に
 つるしておきます。



人がときどききて、水道をつかいます。水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、音をたてて流れているのをきいて、ひわは、そのまねをして、



「ジャージャー、ジャージャー」。と、すずしい声で鳴きます。さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ」と、ひわもまねをします。

かえでの木につるしておく、いろいろな鳥がやってきます。すずめがきたとき、ひわが、「チュイン、チュイン、チュイン」と鳴いてみせました。

すずめは、
「チチチチチ、チュピ、チュピ、チュピ。」

と鳴きました。ひわが、
「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ。」

と、さわがしく鳴いてみせました。
と、すずめは、おどろいてとん



でいってしまいました。みそさざいが、くらい木の中からきたので、ひわが、

「チュイン、チュイン。」

と鳴きました。すると、みそさざいは、

「チョツ、チョツ、チョツ。」

と鳴いて、木のかげにかくれました。

どこからか、しじゅうからがやってきて、

ツイベー、ツイベー。シチビー、シチビー。

ツーピー、ツーピー。チンカラカラ、チンチンカラカラ。

と、いい声で鳴いて、おしまいに、

ジュリ、ジュリ、ジュリ、ジュリ。」

と、本をよむようなひとりごとをいいました。ひわは、感心したように、いつまでもその声をきいていました。しじゅうからは、あくる日もやってきました。そのつぎの日もやってきました。それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになってきました。

いつのまにか、しじゅうからは、どこかへいってしまいました。ひわは、いつもそのまねをしては、ひとりよろこんでいました。

「まあまあ、この鳥は、いくつもげいができるのね。さんちゃんのおかあさんも、ひわをほめました。」

秋になると、また、わたり鳥がやってきました。ある日

二三ばのひわが、さんちゃんのうちのまつの木におりてきました。

ひわは、それを見ると、

「チュイン、チュイン、チュイン、チュイン。」

と、せきこむように、さかんに鳴きました。旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

旅のひわが、

「きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。空はひろくてももしろいよ。」

といました。

「ありがとう。ぼくはおともができないのさ。」

「どうして。」

「ほら、羽がだめだから。こうしていつまでも、ここにいらよりしかたがないのさ。」

「ここにいて、なにか、おもしろいことがあるのかい。」

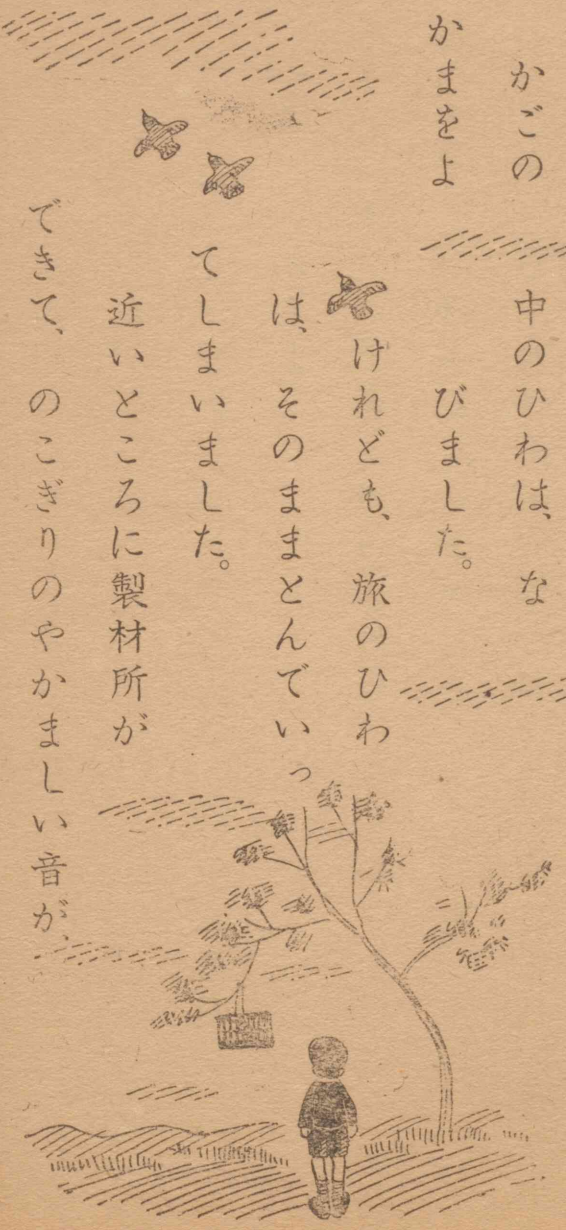
「いろいろあるよ。」

そういって、ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つきからつきへときかせました。

そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、かごのひわは、大よろこびで「チュイン チュイン」をはじめました。

「きみ きみ。おりてこないかい。ぼくの友だちのさんち
やんだよ。ちっともこわいことはないから、いっしょに
あそぼうよ。」

かごの 中のひわは、な
かまをよ びました。



あさからばんまでひびきました。近所の人たちは、

「まいにち、こまった、こまったといっていました。しかし、
ひわは、すぐに、

「チュイン、チュイン、チュイン。リリリン、リリン、リ
ーン。チュイン、チュイン、リリリンリーン。」
と、まねをしました。

「小鳥でも感心なものだ、新しいことをどんどんおぼえて
いく。」

おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんは、ますま
すひわがかわいくなりました。

國語 第三学年 上
 Approved by Ministry of Education
 (Date Jan. 11, 1949)

著作權所有 文 部 省

翻刻發行 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 印刷者 東京書籍株式会社
 代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式會社堀船工場

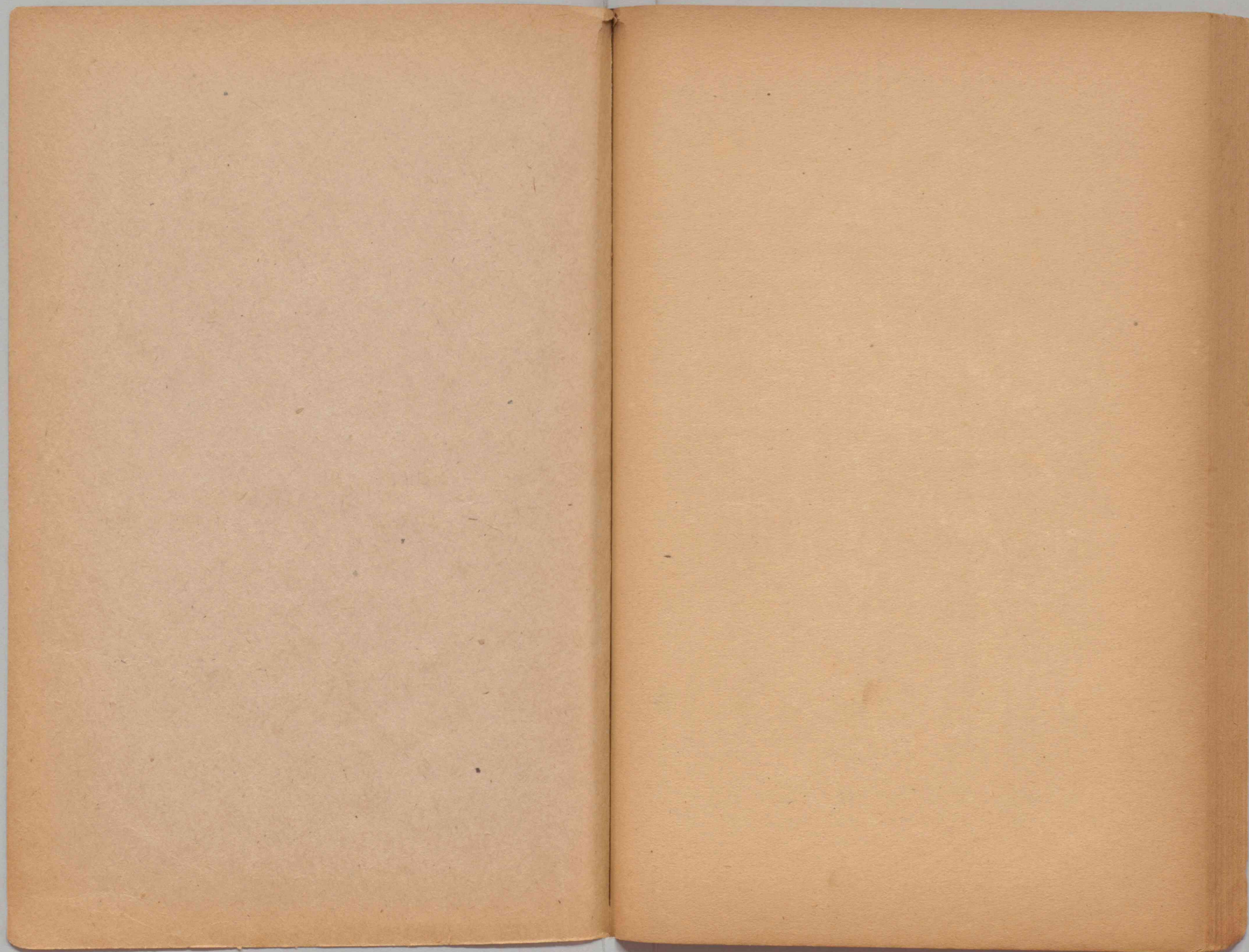
發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地
 東京書籍株式會社

昭和二十二年三月三日翻刻發行
 昭和二十三年一月十日再版翻刻發行
 昭和二十四年一月十五日修正翻刻印刷
 昭和二十四年一月二十五日修正翻刻發行
 (昭和二十四年一月二十五日 文部省檢査済)

定價拾九圓

(信)

製 (108)	室 (78)	住 (65)	平 (44)	材 (32)	終 (21)	改 (8)	草 (4)
所 (108)	流 (78)	新 (68)	和 (44)	茶 (33)	点 (21)	乘 (8)	土 (4)
業 (79)	週 (74)	通 (46)	工 (34)	歸 (21)	勞 (10)	電 (6)	
念 (83)	間 (74)	鳴 (46)	場 (34)	店 (23)	明 (10)	野 (6)	
真 (83)	入 (77)	身 (49)	送 (38)	物 (23)	配 (11)	汽 (7)	
運 (83)	級 (77)	分 (55)	美 (40)	受 (28)	駅 (11)	船 (7)	
語 (84)	記 (77)	今 (55)	岸 (41)	持 (29)	遠 (15)	荷 (7)	
死 (94)	時 (78)	写 (60)	田 (42)	炭 (32)	近 (15)	私 (8)	
感 (105)	教 (78)	金 (65)	屋 (43)	貨 (32)	動 (19)	旅 (8)	



文庫
0
949
7137

広島大学図書
2000067137

